

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

動物園にも秋はふけてきた。修学旅行の一隊が頭から色とりどりのビニール風呂敷をかぶって、動物舎を廻^{まわ}っていた。運動靴はびしゃびしゃに濡^ぬれて、寒そうな手をしているけれど、子どもたちの動物を見る眼^めは好奇心と楽しさで光っている。先生に促^うされても立ち去りたくなくて、まるで見とれている。けれどもどの子もそうではない。あまり関心を示していない子もいる。

雨の日だから猛獣は運動場に出ず、寝部屋にいたのだが、子どもたちは押しあいへしあい、並んだ猛獣の檻^{おり}をあちこち見て歩く。「ヒョーっていうのは、わりとちつちえなあ。もつとでつかいいいのに！ これじゃつまらないや」「でつかいのなら象がいたじゃないか」「象が猛獣か？ 象は違うぞ、あれは猛獣じゃない。いくらでかくても象は猛獣じゃない。ねえ、そうだねえ」

その子はいい負かされてしまったが、象を猛獣に入れるのは不服なのだ。その気持ちもわかるような気がする。猛獣とそうでない動物との区別はしにくいのである。この子はきつとその日以後、象を猛獣とおぼえはするだろうけれど、心の中すっかりに象を猛獣と納得するのではあるまい。彼はヒョーを猛獣だと承知^ちしていたのだし、実際に眼で見たとくろでも猛獣であることを納得したようなのだ。ただ、彼の思っていたより豹^{ひょう}が小さい軀^{からだ}だったことは、いささか残念なのだろう。象は見

ないうちから大きいと思っており、その通り満足の行く大ききだった。だが、象に猛獣という観念を持っていなかったのだし、眼で見たところも猛獣という気が起きなかったのである。それは友達にいい負かされたことぐらいで、すぐに納得できない性質のものであると、私は思う。彼の心の中の象も眼に見た象も、彼には何らの猛獣のしるしを与えないのである。もつと大きくなれば知識でわかることもできるし、眼も象の猛獣である証^し拠^こをいろいろ見いだすだろうが、いまいい負かされつつも、青いビニールの風呂敷の下で不服きわまる顔つきをしているのを見ると、私は同情するのだった。動物の見かたや区わけのしかたは、人それぞれで、規則からはみ出した思いかたをする子があってもしかたがない。豹がわりに小柄な動物だったにしても、あれは猛獣だと納得できるのだし、象は大きくても猛獣のなかへ数え入れるのは、彼には(②)なのだ。猛獣だと友達^{とも}のみんながいいまくるから、呑^のみこんでしまったものの、つかえていて腑^ふに落ちないのである。こなれないのである。もし豹が象ほど大きかったら、彼はどんなふうに猛獣ということを受け取るかしら、と思った。区わけというのはむずかしい。納得からはじまらなくてはならないものである。彼もやがて子どもの父になって、その子連れて象の前に立ったときどんな区わけで話すだろう。

(幸田文『動物のぞき』による)